

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 細隙灯顕微鏡写真を別図 1 に示す。
観察法で適切なものはどれか。
a 直接法 b 間接法 c 徹照法 d 反帰光線法 e 鏡面反射法
- 2 50 歳の女性。1 か月前に充血と眼脂を自覚して他院で治療を受けていたが、眩しさが続くため来院した。細隙灯顕微鏡写真を別図 2 に示す。
感染した病原体はどれが疑われるか。
a アデノウイルス b エンテロウイルス c サイトメガロウイルス
d 単純ヘルペスウイルス e 水痘帯状疱疹ウイルス
- 3 35 歳の女性。5 年前に原因不明の両眼視神経萎縮を指摘されている。視力は右 0.08(矯正不能)、左 10 cm 指数弁。右眼の Goldmann 視野と障害程度等級表および等級別指数表を別図 3A, 3B, 3C, 3D に示す。左眼の視野は測定不能。
身体障害者福祉法に基づく視覚障害の等級はどれか。
a 視力障害 4 級, 視野障害 2 級で合わせて 1 級 b 視力障害 3 級, 視野障害 2 級で合わせて 1 級
c 視力障害 3 級, 視野障害 3 級で合わせて 2 級 d 視力障害 4 級, 視野障害 2 級で合わせて 2 級
e 視力障害 4 級, 視野障害 3 級で合わせて 2 級
- 4 通院中の患者に関して、地方自治体から別図 4 に示す意見書(一部抜粋)が送付された。
正しいのはどれか。
a 特定疾病以外では申請できない。 b 根拠となる法律は介護保険法である。
c 身体障害者手帳との重複申請はできない。 d 介護を希望する 40 歳以上の本人が申請する。
e 眼科医は主治医として意見書に記入できない。
- 5 72 歳の男性。3 か月前から右下眼瞼にしこりのようなものが現れ、徐々に大きくなってきたため来院した。前眼部写真を別図 5A に示す。
該当する生検の組織像は別図 5B のどれか。
a ① b ② c ③ d ④ e ⑤
- 6 10 歳の男児。両眼の掻痒感と充血および眼脂の悪化を主訴に来院した。近医で抗アレルギー点眼薬が処方されている。角膜に異常所見は認めない。前眼部写真を別図 6 に示す。
治療はどれか。2 つ選べ。
a 抗菌薬点眼 b 免疫抑制薬点眼 c 副腎皮質ステロイド点眼
d 非ステロイド系消炎薬点眼 e 抗アレルギー薬内服
- 7 49 歳の女性。3 か月前から徐々に右上眼瞼が下垂してきたと訴えて来院した。視力は右 1.0(矯正不能)、左 1.2(矯正不能)。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。正面視および下方視の顔面写真を別図 7 に示す。
行うべき検査はどれか。
a 抗アセチルコリン受容体抗体測定 b 甲状腺関連自己抗体測定 c IgG4 抗体測定
d テンシロントテスト e 頭部 MRI
- 8 35 歳の男性。2 日前からの左眼の痛みを主訴に来院した。前眼部写真を別図 8 に示す。
適切でないのはどれか。
a 抗菌薬点眼 b 抗菌薬眼軟膏点入 c 抗菌薬内服 d 切開排膿 e 切除摘出

- 9 90 歳の女性。白内障の定期検診で異常を指摘されて来院した。右眼前眼部写真と角膜病変の生検の組織像を別図 9A, 9B に示す。
適切な治療はどれか。
a 副腎皮質ステロイド点眼 b 抗アレルギー薬点眼 c 角膜病変のみ部分切除
d 病変の拡大切除と冷凍凝固 e 眼球摘出
- 10 66 歳の男性。以前から左眼結膜の黒い小さな点に気付いていたが、1 年前から徐々に大きくなり、3 か月前から著明に増大したため来院した。前眼部写真と病理組織像を別図 10A, 10B に示す。
診断はどれか。
a 母斑 b 悪性黒色種 c 強膜軟化症 d メラノーシス e メラノサイトーシス
- 11 43 歳の男性。左顔面の違和感と疼痛に引き続き、左眼の霧視を自覚したため来院した。視力は両眼ともに 1.2 (矯正不能)。眼圧は右 14 mmHg, 左 10 mmHg。顔面写真を別図 11 に示す。
正しいのはどれか。
a 口内炎を伴う。 b 虹彩の萎縮を来す。 c 網膜の壊死を来す。
d 若年者には生じない。 e 副腎皮質ステロイド点眼薬は禁忌である。
- 12 20 歳の男性。10 歳頃から両眼の視力低下を生じ、2 年前に両眼の治療的レーザー角膜切除術を施行されているが、最近再び視力が低下したため来院した。右眼前眼部写真を別図 12 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
a 混濁は実質深層に及んでいる。 b 両親は近親婚であることが多い。
c 角膜移植を行えば再発が予防できる。 d *TACSTD 2(MISI)* 遺伝子の異常がある。
e 沈着物は Masson トリクローム染色で赤く染まる。
- 13 45 歳の男性。前眼部写真を別図 13 に示す。
適切な治療はどれか。2 つ選べ。
a 抗菌薬点眼と点滴 b 副腎皮質ステロイド点眼と内服 c 結膜被覆術
d 全層角膜移植術 e 角膜上皮形成術
- 14 35 歳の男性。右眼の充血と疼痛および視力低下を主訴に来院した。右眼前眼部写真を別図 14 に示す。
適切な治療はどれか。2 つ選べ。
a 角膜表層搔爬 b クロロヘキシジングルコン酸塩点眼 c フルオロメトロン点眼
d アシクロビル眼軟膏点入 e バルガンシクロビル内服
- 15 39 歳の女性。26 歳の時から眼科通院中である。最近、両眼の視力低下が進行したため来院した。前眼部写真を別図 15 に示す。
正しいのはどれか。
a 全身合併症は少ない。 b 網膜色素変性を合併しやすい。
c 深層層状角膜移植は禁忌である。 d 虹彩前面の嚢胞形成が特徴的である。
e ライソゾーム酵素の欠損によりムコ多糖類が不足する。
- 16 58 歳の男性。左眼の視力低下を訴えて来院した。15 年前に左眼眼球打撲の既往がある。
左眼前眼部写真を別図 16 に示す。
診断に有用な検査はどれか。2 つ選べ。
a 隅角検査 b 角膜知覚検査 c 静的視野検査
d 多局所 ERG 検査 e 超音波 B モード検査

- 24 在胎 27 週，出生時体重 950 g の乳児．生後 4 週目に眼科の診察を初めて行った．眼底写真を別図 24 に示す．正しいのはどれか．
- a 自然軽快の可能性が高い．
 - b 国際分類 Stage I である．
 - c 国際分類 Stage II である．
 - d 網膜血管は国際分類 Zone III まで延びている．
 - e 急速に進行して網膜剝離に至る可能性が高い．
- 25 3 歳の男児．眼位異常を指摘されて来院した．両眼の眼底写真を別図 25 に示す．満期産で出生している．診断に有用な検査はどれか．2 つ選べ．
- a ERG
 - b OCT
 - c 頭部 CT
 - d 両親の眼底検査
 - e フルオレセイン蛍光眼底造影
- 26 眼底写真を別図 26 に示す．この所見の背景で考えられるのはどれか．2 つ選べ．
- a 眼外傷
 - b 近視眼
 - c 若年者
 - d 白内障術後
 - e 後部硝子体剝離
- 27 34 歳の男性．数年前から両眼の視力低下を繰り返していた．右眼眼底写真を別図 27 に示す．左眼にも同様の所見を認める．この疾患で正しいのはどれか．
- a 浅前房を生じる．
 - b 南九州で罹患率が高い．
 - c HLA-B 51 と関連がある．
 - d 常染色体優性遺伝である．
 - e 閉塞性網膜血管炎を生じる．
- 28 32 歳の女性．左眼の視力低下を主訴に来院した．左眼眼底写真と眼窩 CT を別図 28A, 28B に示す．診断はどれか．
- a 脈絡膜骨腫
 - b 脈絡膜血管腫
 - c 眼内リンパ腫
 - d 脈絡膜悪性黒色腫
 - e 転移性脈絡膜腫瘍
- 29 26 歳の男性．右眼の霧視を主訴に来院した．以前にも同様の症状で治療している．両眼の眼底写真を別図 29A, 29B に示す．正しいのはどれか．
- a 前房蓄膿を伴う．
 - b 網膜剝離を生じることが多い．
 - c 血中特異的 IgM 抗体上昇
 - d 血中特異的 IgG 抗体上昇
 - e 眼内液 IL-10 値上昇
- 30 38 歳の男性．左眼の視力障害を訴えて来院した．視力は右 1.2 (矯正不能)，左 0.6 (矯正不能)．左眼眼底の後極と周辺部の写真を別図 30A, 30B に示す．原因として考えられるのはどれか．2 つ選べ．
- a 結核菌
 - b 風疹ウイルス
 - c サイトメガロウイルス
 - d 単純ヘルペスウイルス
 - e 水痘帯状疱疹ウイルス
- 31 24 歳の女性．最近，全身の倦怠感を自覚している．健診で眼底の異常を指摘されて来院した．初診時の眼底写真を別図 31 に示す．鑑別すべき疾患はどれか．2 つ選べ．
- a 結核
 - b 糖尿病
 - c 白血病
 - d サルコイドーシス
 - e 亜急性細菌性心内膜炎
- 32 55 歳の男性．以前から視力の変動を自覚している．細隙灯顕微鏡写真を別図 32 に示す．合併症で正しいのはどれか．3 つ選べ．
- a 強度近視
 - b 円錐角膜
 - c 白内障
 - d 緑内障
 - e 網膜剝離

- 33 47歳の女性。側方視時の複視を主訴に来院した。眼痛に対してステロイドパルス療法を受けた既往がある。眼痛は消失したが複視は残存している。眼窩MRIとHess赤緑試験の結果を別図33A, 33Bに示す。
適切な治療はどれか。
a プリズム眼鏡の処方 b 右眼内直筋後転術 c 右眼外直筋切除短縮術
d 左眼内直筋後転術 e 左眼外直筋切除短縮術
- 34 1歳4か月の男児。生後3か月から右への斜頸があり、10か月から眼の位置がおかしいと母親が訴えて来院した。頭位変換での眼位写真を別図34に示す。
この患者にみられる所見はどれか。
a 交差固視 b 左眼球陥凹 c 左瞼裂狭小 d 右内上転障害 e 左内下転障害
- 35 69歳の女性。1年前から左眼が右方向に引っ張られてつらいと訴えて来院した。視力は右0.06(0.7×-5.75 D ⊂ cyl-1.75 D 95°), 左0.01(0.15×-15.00 D ⊂ cyl-3.00 D 10°).
水平3方向眼位写真を別図35に示す。
左眼の適切な治療はどれか。2つ選べ。
a 眼窩減圧術 b 下斜筋後転術 c 上斜筋移動術 d 内直筋後転術 e 上・外直筋縫合術
- 36 29歳の男性。2週前に左眼の霧視と眼球運動痛を自覚した。視力は右1.5(矯正不能), 左0.04(矯正不能)。左眼に中心暗点と相対的瞳孔求心路障害を認める。眼球運動に異常はない。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。全身には神経学的な異常を認めない。
眼窩部MRIと頭部MRI(FLAIR)写真を別図36A, 36Bに示す。
この症例で正しいのはどれか。
a 再発の可能性は低い。 b 視力予後は不良である。
c 眼窩部MRIはT₂強調画像である。 d 副腎皮質ステロイド内服療法の適応である。
e 将来的に過半数が多発性硬化症へ移行する。
- 37 54歳の女性。難治性の左眼充血を訴えて来院した。前眼部写真とMRI画像とを別図37に示す。
他に認められる所見はどれか。2つ選べ。
a 眼内炎 b 眼圧低下 c 視力低下 d Bruit聴取 e 眼球運動障害
- 38 63歳の女性。2週前に交通事故で頭部を打撲後、複視を自覚したため来院した。頭部を右に軽度傾斜している。眼位は正面視で左眼6Δの左上斜視、複視は下方視で増強する。
この患者のHess赤緑試験の結果は別図38のどれか。
a ① b ② c ③ d ④ e ⑤
- 39 64歳の男性。2日前からの複視を自覚して来院した。10年前から糖尿病を指摘されているがコントロールは不良である。Hess赤緑試験の結果を別図39に示す。頭部MRIは年齢相応の変化がみられる。
治療で正しいのはどれか。
a 経過観察 b 眼球運動トレーニング c 基底内方プリズムの処方
d 副腎皮質ステロイド内服 e 副腎皮質ステロイドパルス療法
- 40 緑内障のHumphrey視野計の中心10-2プログラムの結果を別図40に示す。
固視点消失の危険性が最も高いのはどれか。
a ① b ② c ③ d ④ e ⑤

- 41 56 歳の女性。3 種類の眼圧下降薬と副腎皮質ステロイド点眼薬を処方されているが、左眼の高眼圧をコントロールできない。右眼は無治療である。視力は両眼ともに 1.2(矯正不能)。眼圧は右 15 mmHg, 左 40 mmHg。左眼隅角写真を別図 41 に示す。今まで緑内障手術を受けたことはない。
- 今後の治療で適切なものはどれか。
- a 緑内障点眼薬の追加 b レーザー線維柱帯形成術 c 線維柱帯切除術
d チューブシャント手術(EX-PRESS®) e チューブシャント手術(Baerveldt®)
- 42 69 歳の女性。2 日前に右眼の眼痛を訴えて来院した。眼圧は右 45 mmHg, 左 16 mmHg。20% マンニトール点滴静注と 2% ピロカルピン塩酸塩頻回点眼で、眼圧は右 21 mmHg, 左 15 mmHg に下降した。細隙灯顕微鏡写真を別図 42 に示す。
- みられる所見はどれか。
- a Fibrin b Glaukomflecken c Hypopyon d Pseudoexfoliation e True exfoliation
- 43 22 歳の男性。右眼を殴られて複視と顔面のしびれを自覚して来院した。頭部 CT を別図 43 に示す。眼窩組織が脱出しているのはどこか。2 つ選べ。
- a 上咽頭 b 篩骨洞 c 上顎洞 d 前頭洞 e 蝶形骨洞
- 44 43 歳の男性。左眼の眼外傷に伴う網膜剥離で硝子体手術を行った。術後の前眼部写真を別図 44 に示す。矢印が示すのは何か。
- a ヒアルロン酸ナトリウム b パーフルオロカーボン c シリコンオイル
d 眼内レンズ e 水晶体
- 45 17 歳の男子。昨日バスケットボールの試合で左眼を打撲し、視力が低下したため来院した。視力は右 1.2 (矯正不能), 左 0.01(矯正不能)。眼圧は右 14 mmHg, 左 18 mmHg。左眼前眼部写真を別図 45 に示す。適切な対応はどれか。2 つ選べ。
- a 安静 b アトロピン硫酸塩点眼 c 副腎皮質ステロイド内服
d 高浸透圧薬点滴静注 e 前房洗浄
- 46 49 歳の女性。10 年前に両眼の LASIK 手術を受けた。半年前から徐々に右眼裸眼視力が低下したため来院した。視力は右 0.08(0.9× -4.50 D), 左 0.8(1.2× -0.50 D)。両眼の前眼部写真と角膜形状解析の結果を別図 46A, 46B に示す。
- 適切な処置はどれか。
- a 角膜移植 b 白内障手術 c 副腎皮質ステロイド点眼
d エキシマレーザー追加照射 e ドライアイに対する点眼治療
- 47 60 歳の男性。両眼の白内障術後経過は良好であったが、左眼の視力が徐々に低下したため来院した。高血圧と糖尿病の既往があり、腎障害で透析を施行している。視力は右 1.0(矯正不能), 左 0.3(矯正不能)。左眼細隙灯顕微鏡写真を別図 47 に示す。
- 適切な治療はどれか。2 つ選べ。
- a 全層角膜移植術 b 表層角膜移植術 c 角膜内皮移植術
d EDTA 液を用いたキレート e 治療的レーザー角膜切除術
- 48 65 歳の女性。右眼の白内障手術時に破囊し、水晶体皮質が硝子体内に落下した。術翌日の視力は右 0.1(矯正不能), 左 0.8(矯正不能)。眼圧は右 4 mmHg, 左 18 mmHg。右眼眼底写真を別図 48 に示す。
- 最も考えられるのはどれか。
- a 脈絡膜剥離 b 滲出性網膜剥離 c 裂孔原性網膜剥離
d 術後細菌性眼内炎 e 水晶体起因性眼内炎

49 68歳の男性。昨日右眼に突然の視力低下を自覚して来院した。視力は右0.1(矯正不能), 左1.0(矯正不能)。右眼眼底写真を別図49に示す。

まず行うべき治療はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド硝子体内注射 b 抗 VEGF 薬硝子体内注射 c 硝子体内ガス注入
d レーザー光凝固 e 光線力学療法

50 55歳の男性。数年前に左眼の網膜剥離で強膜内陥術を受けた。経過は良好であったが、最近、左眼の視力低下を自覚して来院した。視力は左0.4(矯正不能)。左眼眼底写真を別図50に示す。

適切な治療はどれか。

- a 経過観察 b 硝子体手術 c 強膜バックリング除去
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射 e 副腎皮質ステロイドテノン嚢下注射